

令和元年度
第1回東久留米市
総合教育会議議事録

令和元年7月1日

東久留米市・東久留米市教育委員会

令和元年度第1回東久留米市総合教育会議

令和元年7月1日午前11時00分開会
市役所7階 703会議室

議題 (1) 私の中に最高のレガシーを残そう
～2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に

出席者(6人)

市	長	並木克巳
教	育	園田喜雄
委	員	尾関謙一郎
(教育長職務代理者)		
委	員	宮下英雄
委	員	細田初雄
委	員	馬場そわか

東久留米市教育委員会会議規則第13条の規定に基づき出席を要求した者の職氏名

副	市	長	西村幸高						
企	画	経	営	室	長	土屋健治			
企	画	調	整	課	長	小堀高広			
教	育	部	長	森山義雄					
指	導	室	長	椿田克之					
教	育	総	務	課	長	佐川公行			
学	務	課	長	白土和巳					
生	涯	学	習	課	長	板倉正弥			
図	書	館	長	佐藤貴泰					
主	幹	・	統	括	指	導	主	事	荒井友香

事務局職員出席者

教育総務課庶務係長 鳥越富貴

傍聴者 10人

◎開会及び開議の宣告

(開会 午前11時00分)

○並木市長 皆さんおはようございます。

ただいまから、令和元年に入り1回目の東久留米市総合教育会議を開催します。

本日は教育長、教育委員の皆さん全員にお集まりいただいています。市では今年度も5月から、原則、ノージャケット、ノーネクタイOKの「クールビス実施中」です。委員の皆様にはあえて本日のテーマに合わせてカジュアルな服装でとお願いしたところ、それではお揃いのポロシャツ着用で、ということになりました。「チーム総合教育会議」という感じがしますね。会議の時間は1時間程度を予定しています。服装同様いつもにも増して、自由な意見交換ができればと思っています。

なお、本日は本市の総合教育会議が始まって以来のことになりますが、報道機関からの撮影の申し込みがあります。許可したいと思いますがいかがでしょうか。

(「はい」の声あり)

それではよろしく申し上げます。

◎傍聴の許可

○並木市長 傍聴の方がお見えになっていますので許可をしたいと思います、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

それでは傍聴を許可します。

(傍聴者 入室)

ここで、傍聴の方にお願ひがあります。傍聴をしていただくに当たりましては、お手元にお配りしている「教育委員会傍聴人規則」を準用させていただきますのでご了承願ひます。なお、お配りしている資料についてはお入り用の方はお持ち帰りいただけます。

◎私の中に最高のレガシーを残そう

～2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に

○並木市長 昨年の9月に開催しました第1回総合教育会議は、「第2次教育振興基本計画(素案)」がテーマでした。その時、私からは、計画の柱の一つであります「オリンピック・パラリンピックの精神を生かした教育の充実」について、「2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に関わる事業については教育委員会だけではなく、市全体で取り組んでいくつもりである。オリンピック・パラリンピックに関わるイベントに直接参加したり観覧する方もいるだろうが、他の参加形態としてボランティアとしても積極的に参加していただくなど、それぞれのレガシーを残していただきたい。」と、意見を申し述べました。

本日の議題はそれに続き、「私の中に最高のレガシーを残そう～2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に」とさせていただきました。2019年度に入り、日本全体が2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、産業、教育、福祉など、あらゆる分野において拍車がかかっていると思います。

本日は主に教育委員会の取り組み事例を伺うなどしながら、意見交換をしていきたいと思っています。必要に応じて、事務局に説明してもらおう場面もありますのでご了承願ひたいと思っております。

さて、教育委員の皆様とオリンピック・パラリンピックを話題に意見交換をするのは初め

てですので、まずは委員の皆様が「オリンピック・パラリンピック」についてどう思っているかを伺いたいと思います。

前回の1964年の東京大会の時は私と馬場委員はずっと後に開催を知ることになりますが、尾関委員、細田委員、宮下委員は学生でいらっしゃいましたね。当時をどのように感じられていたのか伺いたいと思います。

いかがでしょうか。尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 私は当時中学2年生でしたが、1964年のオリンピックの開会式に出ています。といっても前日の予行演習ですが。観客として中学校の生徒が動員されまして、坂井選手が聖火を着火する場面も見ています。マラソン競技の時は学校にいましたが授業中であるにもかかわらず、教室にテレビを置いて、先生も生徒もみんなと一緒に見た記憶があります。学校現場でも本当にオリンピック一色でした。

私は生徒新聞みたいなものを発行していたのですが、開会式のことを記事に書いた記憶もあります。そういうことがいろいろ刺激になり、そのころから新聞記者になりたいと思っていました。今思えば、新聞記者になった一つのきっかけだったと思っています。

今回も東京での開催となりましたから、オリンピック・パラリンピックというものは子どもたちに、特に東京の子どもたちにとって、さまざまに将来の道を広げていく可能性があるものなのだ、そういう底知れない可能性を秘めたイベントなのだと思います。

○並木市長 将来に影響を受けたオリンピックというお話でした。

細田委員はいかがですか。

○細田教育委員 私は小学校6年生でしたが、オリンピックの熱気に負けないぐらい、既に当時から少年野球に熱中していました。それ以来、高校、大学、社会人と野球を続けましたが、社会人の時は世界大会にも出場できました。今も野球に携わっています。

当日は大会種目に野球がなかったのがとても残念で、正式種目に野球があったら自分たちも日本代表に選ばれたいと、チームメイトと練習に励んでいました。

○並木市長 ありがとうございます。

宮下委員はいかがでしょう。

○宮下教育委員 私は大学4年生でした。中学校、高等学校の理科の教員免許取得のために、教育実習の真最中でした。ちょうど学校近くの街道を聖火が通ることを知り、生徒たちと一緒に聖火ランナーを応援に行きました。沿道を覆い尽くすばかりの歓声と拍手が近づいてきたと思ったら、あっという間に、白い煙と青い聖火が目の前を通り過ぎていきました。蒸気機関車が煙を吐きながら遠くから近づいて、また遠くのくこの状況がありますね。そのような現象であった気がします。その後は、辺り一面に白い煙と燃えた香り、聖火の輝き、勇壮なランナーの姿を、今や55年も経っていますが脳裏に鮮明に残っています。もしかしたらその時に見た聖火ランナーが、本日、傍聴に見えている坂本さんだったのかもしれませんが。そんな気がしてきました。

また、オリンピックの競技期間中は、世界各国の一流選手のプレイをテレビ観戦していました。日本の選手がいい成績を出しますと、私の理科の専門用語で表現しますと、まさに日本中が沸騰点を超え、どの家庭からも大きな歓声が湧き上がっていたことを記憶しています。その当時、各家庭にはテレビが1台あるかないかという状況でした。ですから、家族みんなで観戦する、または隣の家の人も一緒になって観戦するという状況でしたので、1台のテレビに群がる沸騰現象はすごかったという印象を持っています。

こんな感じで私はその当時を過ごしていたのですが、ここで少しお時間いただければ関連

してお話を続けたいのですがよろしいでしょうか。

○並木市長 どうぞ。お願いします。

○宮下教育委員 ありがとうございます。

今回の総合教育会議の議題は2020年東京オリンピック・パラリンピックでしたので、議題を聞いた時にいろいろ思い出していたわけですが、「前回の大会が行われた1964年は今から50～60年前。当時は日常生活の中で“スポーツ”とどのように関わっていたかな」と、振り返って考えてみました。

1961年にはスポーツ振興法が制定され、1964年にはオリンピック・パラリンピックが東京で開催されましたので、もちろん「スポーツ」という言葉は知られてはいましたが、今日のような理解やカテゴリーは注目されてはいなかったと私は思います。今は当たり前のように「スポーツ」や「生涯学習」の言葉が使われていますが、50～60年前は「スポーツ」というより、「体育」の方が親しみやすく使われていたという時代でした。当時は東京都教育委員会でも、指導部と体育部に分かれていた時代ですから。私は教員でしたので、そういう感覚を強く持っています。

50～60年前、「生涯学習」や「スポーツ」に代わるものとして盛んだったものがあるのですが、皆さんは何だと思えますか。答えは今日の資料の中にもあります。本日の本題に入る前のウォーミングアップです。

○並木市長 ご質問ですね。

尾関委員、どうぞ。

○尾関教育委員 当時は若かったのであまりピンときていません。私自身で言えば身体の鍛錬のために、中学、高校で剣道、柔道、陸上等をやっていました。運動を楽しむというより、記録の向上を目指す個人種目が盛んではなかったかと思えます。

○並木市長 ほかにありますか。

細田委員どうぞ。

○細田教育委員 1950年代、1960年代ならば、多くの人は自分がスポーツ、運動に取り組むというよりも、スポーツ選手の健闘する姿を見て自分が実際にやっているような、闘っているような気持ちになることを楽しんでいたのかなと思います。なんてたって、その時代は「野球は巨人、相撲は大鵬、プロレスは力道山」の時代でしたから。

○並木市長 ありがとうございます。

宮下委員いかがですか。

○宮下教育委員 ありがとうございます。尾関委員や細田委員のご見解もそのとおりだと思いますが、私が思っている言葉は引き出せませんでした。実は「レクリエーション」なんです。ここにいる皆さんも世代に関わらず、「レクリエーション」という言葉はご存じだと思います。

東京オリンピックの開催を挟んでの1950年～1960年代はちょうど私の青年時代ですが、この「レクリエーション」が今の「生涯学習」のように浸透していて、スポーツ的なことや今で言う生涯学習的なことまでも広く含んでいたのです。しかし、個人でスポーツ等に関わる機会や場というよりも、どちらかというと職場や学校などで、みんなが楽しむ場として「レクリエーション」が普及していたと思います。時代とともにいつの間にか「レクリエーション」は使われなくなってしまいました。懐かしい言葉です。その「レクリエーション」で何をしていたかという、健康増進という目的もありましたが、職場の雰囲気づくりのための「みんなで楽しむ」ことが主流でした。

お時間をいただき、1964年前後のスポーツや生涯学習の状況について少しお話しさせていただきました。

○**並木市長** 面白いお話を伺わせていただき、ありがとうございました。

お話を伺いながら資料をめくっていたのですが、資料1の中に下里中学校の平成30年度の取り組み事例がありましたが、今まさに言われた「全校レクリエーション」が紹介されていますね。久しぶりに「レクリエーション」という言葉を見た気がします。

「しっぽ取り」「フリースロー大会」を今もやっているということですが、勝敗をつけるというより、まさしく、「みんなといる時間を楽しむ」という狙いがあるんですね。

馬場委員はいかがですか。

○**馬場教育委員** 私は、オリンピック・パラリンピックはとても遠い世界だと思っていました。両親や祖父母に聞いたりはしましたが、直接体験していない世代として、そして、運動があまり得意でない者としてですが本当に身近なものではなく、遠くでキラキラしている憧れの世界でした。それが今回は日本で、まして東京での開催ということですので、近づいてくるにつれどきどきしてきます。見て楽しむレクリエーションとして、みんなと共有できたらいいなと思います。

本日の議題であるレガシーについて考えてみましたが、前回の東京大会では開催を契機に新幹線が通ったり、首都高速道路が整備された等の有形のレガシーの印象が強いのですが、今回の2020年の大会ではそういった意味だけではないレガシーを、どのように次の世代に残していけるのかが問われていると思います。

○**並木市長** 委員の皆様からそれぞれ感想を伺いました。ありがとうございます。

ただ今、馬場委員からレガシーのお話がありました。後ほどこのレガシーについては改めて意見交換をしたいと思います。まずはレガシーを創出するきっかけとして、学校教育分野と生涯学習分野における機運醸成の取り組み事例を伺いたいと思います。

それでは、学校教育分野からお願いします。

○**椿田指導室長** 本市では全ての小中学校で、オリンピック・パラリンピックに向けた機運醸成を行っています。昨年度の取り組みの一部と、今年度に予定している取り組みについて説明します。

小学校全校では豊かな国際感覚を育むための取り組みとして、「世界ともだちプロジェクト」を実施しています。資料1の研究集録の48ページに写真が載っていますのでご覧ください。これは東京2020大会の参加予定国や地域を深く学び、実際の国際交流に発展させる取り組みです。一例として、1年生は国旗・国の花、2年生は遊び・歌、3年生は食べ物・家のつくり、4年生は通貨・服装、5年生は位置・人口・国土面積・気温、6年生は名所・日本との関わりについて学習し、調べた内容を掲示している学校があります。

中学校では、国際感覚を養う取り組みのほか、ボランティア精神の涵（かん）養に向けた講演会を実施している事例があります。一般社団法人「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」代表理事を招き、人権や他者を思いやる心、ボランティア、自己尊重について講演を行いました。

今年度からは、各学校で実施されている取り組みをレガシーとして次世代に引き継いでほしいという願いから、「学校レガシー」として各学校で引き継いでいく取り組みを構築しています。その一覧が資料2になります。小学校では体力向上や障害者理解、国際理解に関する取り組みが中心で、中学校ではボランティア精神の涵養、国際理解に関する取り組みが中心です。

学校レガシーについては教育課程届出に明記することとし、その取り組みについては今年度もお手本の「研究紀要」のように全校の取組内容として紹介する予定です。

○並木市長 ありがとうございます。

ただいまの説明に関して何かご質問等がありますか。

○馬場教育委員 競技内容や出場する国の選手のことを事前に知って「観戦する」のであれば、感動も違いますし、そういう準備が学校で行われていることはとてもいいことだと思います。

都内の小・中学校の児童・生徒が国立競技場でオリンピック・パラリンピックを観戦できる事業があると聞いたのですが、どの競技を、いつ、誰が観戦できるとかはいつごろ分かるのでしょうか。観戦できるとなれば、調べ学習をするにもやる気が出てくるのではないかと思いますのですが。

○並木市長 子どもたちの「観戦」についてのご質問です。

事務局どうですか。

○椿田指導室長 現時点は何を観戦するかについてはまだ連絡は来ていません。ただし、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の小・中学生の観戦については、昨年度から本市としまして東京都教育委員会に、できるだけ多くの子どもの参観させたいと希望しています。先月、東京都教育委員会から、児童・生徒の競技観戦に係る意向調査がありましたので、「小学校3年生から中学校3年生までの児童・生徒の観戦を希望する」と回答しています。一人でも多くの子どものために豊かな思い出が強く心に残るよう、取り組みを進めていきます。

○並木市長 馬場委員いかがでしょうか。

○馬場教育委員 保護者にとっても、そういう経験を子どもたちにさせていただけることはとてもありがたいと思います。

○並木市長 ほかにありますか。

細田委員どうぞ。

○細田教育委員 平成30年度の各校の取り組みを見ると、オリンピック・パラリンピックを契機とする心身の育成はもちろんですが、他者を思いやる気持ちの育成や自尊感情を高める取り組みなど、各校の特色が生かされていると思います。令和元年度の取り組みは、これまでの取り組みをさらにパワーアップさせていく内容になっているのだと思うと、来年の報告が楽しみです。

先ほど宮下先生が思い出と共に語られた「レクリエーション」ですが、調べ学習の題材として、その後についても調べてみたら面白いことがいろいろ発見できるのではないかと思います。

○並木市長 ほかにありますか。

尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 先ほど市長が下里中学校の「レクリエーション」活動にふれられていましたが、平成30年度に、市教育委員会では全中学校の生徒会役員経験者に集まってもらって、いじめをテーマとする座談会を開催しています。教育委員会だよりも載っていますが、下里中学校の生徒の発言で記憶に残っていることがあります。いじめをなくすために、下里中学校では寸劇をやったり、体育会や学習発表会などのいろいろな機会を捉えて“学校全体で交流を深めている”とありました。もちろん規模は小さいですが、下里中学校の中ではそういう活動が「レクリエーション」として根づいているからこそ、いじめ対策にもつながっているのかなと改めて思いました。

「レクリエーション」には内容がいろいろあります。フォークダンスやスポーツだけではなく、今の時代においても意義があり、可能性もあるのではないかと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。宮下委員どうぞ。

○宮下教育委員 指導室長から「学校レガシー」の取り組みについてご説明いただきました。

オリンピック・パラリンピックの開催効果を学校教育に取り込んで、子どもたちの心に残してあげたいという、創意ある各学校の具体的な取り組みが行われていると感じています。

しかし、いきなり、学校教育の取り組みがオリンピック・パラリンピックという魔法によって大変革を遂げ、一転して、それが「学校レガシー」になるということではないのだろうと思います。この機会を通して「学校レガシー」へとつくり上げるためには、日ごろから各学校が取り組んでいるさまざまな教育活動を基盤にしてそれにプラスすると言いますか、オリンピック・パラリンピックの意義を加味した意識した、色付けした活動へと変容させることが大切だと考えます。そうすることにより、児童・生徒たちの自分のオリンピック、自分のパラリンピックとなり、開催を楽しみながら、そして、自己の心身の成長に結び付けていくことができるのではないかと思います。そうすれば自然にそれが個々の子どもたちのレガシーとなり、さらに、その個々のレガシーが集まり、凝縮されたものが「学校レガシー」になるのだと思います。

ついでには、個々のレガシーをつくろうとする意識形成が先ずはとても重要になりますね。

○並木市長 ありがとうございます。ほかはよろしいでしょうか。

続いて、生涯学習分野についての説明をお願いします。

○森山教育部長 それでは、資料3の「令和元年度2020東京オリンピック・パラリンピック機運醸成事業の取り組み」をご覧ください。令和元年度に予定されているオリンピック・パラリンピックの機運醸成事業について紹介します。

市主催事業の一つ目、「ハンドボールフェスティバル」です。本年度で3年目となりました。まさに、昨日、武蔵村山市総合体育館において、ハンドボールフェスティバルを開催しました。非常に多くの方々に応援に来ていただき、盛大に開催することができました。午前中はエキシビジョンマッチとしてトップ選手の一流のプレイを体験し、午後からは小学生、中学生による対抗戦を実施しました。このほかハンドボールの裾野を広げる取り組みとして、小学生、中学生、高校生以上に分けて東久留米市及び武蔵村山市それぞれにおいてハンドボール教室を実施することとなっています。二つ目は、「オリンピック・パラリンピック機運醸成事業委託」です。本年度は合計3回にわたりスポーツ教室を実施します。7月15日の卓球教室には卓球元日本代表監督の近藤欽司さんをお招きするほか、秋には水泳教室、令和2年1月には上の原の屋外運動施設のオープニングに合わせ陸上競技教室、走り方教室を実施する予定です。三つ目は「ボッチャ体験教室事業委託」です。ボッチャ競技はパラリンピックの正式種目であり、近年では障害の有無にかかわらず老若男女、誰でも楽しめるスポーツとして実施されています。体験教室等を実施し、その普及に努めています。

また、6番目の「ニュースポーツデー」においてもボッチャ競技を“一押しスポーツ”に位置付けて、毎回、参加者にボッチャの楽しさやルールを伝える取り組みを続けています。

そのほか「NO LIMITS CHALLENGE」「つなひき大会」「ニュースポーツデー」などを通じ、機運醸成に努めています。

続いて広域的な取り組みとして、二つご紹介いたします。いずれもボッチャですが、多摩30市町村連携事業として「東京都市町村ボッチャ大会」、多摩北部都市広域行政圏協議会生涯

スポーツ専門委員会事業として「(仮称)多摩六都 BOCCIA CUP」を実施します。

いずれにしても多くの皆様にスポーツに触れる機会を提供する中で、引き続き機運醸成に努めていきたいと考えています。

○並木市長 ありがとうございます。

ただいまの件に関して何かありますか。細田委員どうぞ。

○細田教育委員 「ボッチャ」という種目が何だかネーミングもかわいいし、気になりました。

障害のある競技者の方に向けて考案されたスポーツと聞きましたが、これ以外にも東久留米市や各区市町村が力を入れているスポーツはありますか。

○並木市長 質問です。事務局どうですか。

○板倉生涯学習課長 各市ではさまざまな取り組みを通じて、オリンピック・パラリンピックの機運醸成を進めていると伺っています。

一例ですが、府中市においては、本年開催のラグビーのワールドカップの開催地である東京スタジアムにも隣接していること、また、トップリーグの強豪2チームが存在することから、ラグビーの町としてその普及に力を入れていると伺っています。さらに、東村山市では、こちらは中国とホストタウンの協定を結ぶ中で、サッカーを通じた事業交流を通じ機運醸成を図る計画をしていると伺っています。

本市では、体育協会加盟団体等の活動やスポーツセンターの指定管理の自主事業などを通じて、日ごろから幅広くスポーツが実施されてきていますが、先ほど教育部長から説明しましたとおり、特に、ボッチャとハンドボールについては教室など開催して力を入れて進めているところ です。

○並木市長 ほかにありますか。

尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 「東久留米市と言えばハンドボール！」というぐらい有名となりました。西中学校のハンドボール部女子は平成20年に全国制覇3連覇を達成し、平成24年には4回目の全国優勝を成し遂げていますから、本市はハンドボールのまちと言ってもいいかと思います。今年度も武蔵村山市と共催でイベントを開催していますので、さらに盛り上がってきています。さらにアピールしてもらえたらと思います。

○並木市長 ありがとうございます。ほかにありますか。

馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 本当にそうだと思います。ハンドボールの競技人口は少ないかもしれませんが、試合を生で見ると、シュートを決める時のジャンプする迫力、相手を抜いてゴールキーパーの間にバウンドさせてシュートを決めるのを見ると、本当に自分が一緒にやっているかのように盛り上がりますし、その迫力が醍醐味だと思います。

観戦するだけでも熱くなりますが、本市の南中学校にも男子のハンドボール部が創立されたそうですし、ハンドボール人口が少しずつ増えてきましたから、またいつの日か、10年前の、その時の様子は残念ながら私は見ていないのですが、そのような感動をみんなで味わいたいなと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

委員の皆様から貴重なお話をいただきました。尾関委員と馬場委員からハンドボールに関するお話がありましたが、それに関わりあいのある方々が教育委員会だよりの特集で座談会をされたことが掲載されており、以前、私も読ませていただきましたので紹介したいと思います。3名の方々ですので「鼎談」になります。

3年前の7月1日号に本日の総合教育会議と同じ議題で、市の体育協会の坂本副会長、当時の市立南中学校の川上校長、当時の市立西中学校の尾石主幹教諭の3名による鼎談が行われています。そこでは、「海外では内戦やテロが発生している国々がある中で、自分たちは自国でオリンピック・パラリンピックを体験できる恵まれた環境に生きていることを認識してほしい」「オリンピック・パラリンピックの開催により学校教育と生涯学習が相乗効果をもたらし、子どもたちが日本人として誇りを持てるきっかけとなってほしい」と述べられています。

「レガシー」についてもご発言があり、「家族や地域との関係を見直す機会になってほしい」と。また、尾石主幹教諭のご発言を引用させていただければ、「昔に比べると家族と一緒にテレビを見るなどの機会がぐっと減ってきていて、みんなで応援するとか声援を送ることがなくなった。家庭という単位ですら共有するものが違ってきている。オリンピック・パラリンピックは今のわれわれの失いかけていた“みんなで楽しむ”ことを提供してくれるのだと思う」という、「一緒に時間を過ごし、一緒に声援を送る」という小さなことではありますが、まさしくそういったことが、私の市政運営におけますビジョンの一つに掲げている「絆」につながっていくのではないかと考えています。

まずは、最少単位である家庭や友人、地域との「絆」の大切さを、オリンピック・パラリンピックの開催を通じて認識できたらと思います。

ほかにいかがでしょうか。細田委員どうぞ。

○細田教育委員 オリンピック・パラリンピックの機運醸成と言えるのか、私からすれば、既にファンファーレに近い気がします。聖火リレーについて伺います。

本市には前回の大会で聖火リレーのランナーを務められました坂本さんがいらっしゃいますが、そのお話を私も伺ったことがあります。ご本人にとってはもちろん貴重な体験だったと思いますし、後で聞いた私たちも感動した覚えがあります。

今回はどのように選ばれるのか、どこの地域を走るのか、いつごろ決まるのかを伺います。

○並木市長 聖火リレーについてのご質問です。事務局お願いします。

○板倉生涯学習課長 聖火リレーについては、令和2年7月15日に、東久留米市内を走行することが既に明らかになっています。詳細な走行経路等については、今後、大会組織委員会と東京都の聖火リレー実行委員会との調整を経て、年末ごろに発表される予定と伺っています。また、聖火リレーについては中学生以上で走行を希望し、各都道府県にゆかりがある方から国籍や障害の有無、性別、年齢のバランスなどに配慮しながら幅広い分野から選定するとされていまして、プレゼンティングパートナー4社及び東京都の聖火リレー実行委員会における募集が、6月中旬から順次開始されています。全ての応募先で締め切りが8月31日となっていて、現在、続々と募集が進んでいます。最終的には各応募先から推薦をもとに大会の組織委員会で聖火ランナーを決定し、概ね12月以降に発表されると伺っています。

○並木市長 機運醸成の取り組みはまだまだ続きますね。引き続きよろしくお願いします。

さて、ほかにいかがでしょうか。馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 残念ながら、本市では、直接、競技が行われたり、練習拠点にも選ばれていないので、ホストタウンとして競技選手たちと交流することはないかと思えます。なので、そういうこと以外のさまざまな取り組みを積極的に行っていく必要があると思うのですが。

○並木市長 「残念ながら」というご指摘にありますとおり、恐縮ではありますが、直接的な機運醸成の取り組みに関しましては答えできるものではありません。

宮下委員のご発言にも、「レガシーには形として残るものとそうでないものがある」とあ

りました。馬場委員が言われたように、今後の市の取り組みとしてはソフト面になってくると思います。私もこの間、市長会等を通じて、組織委員会や都のオリンピック・ムーブメントの取り組みについては認識していますが、プログラム化された学校教育分野における取り組みに比べ、市独自の取り組みとなるとなかなか難しいと感じています。

「私の中に最高のレガシーを残す（残してもらおう）」にはどうしたらいいのか。市としての取り組みが何かできないか、私もいろいろと考えているところですが、ぜひ、この総合教育会議の中で、委員の皆様のご意見を伺いたいと思っています。

早速、馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 ロンドン大会やリオ大会をテレビ観戦している子どもたちでさえ、自分たちが住んでいる間近での開催となれば、私でさえどきどきするぐらいなので、開催前後では子どもも大人も気持ちや考え方が大きく変わるのだらうと思います。それを何かの機会としてぜひ捉えたいです。

先ほど、市長が紹介された鼎談の中で、当時の南中学校の川上先生が、「選手でないからこそできることがある」「特に子どもたちにはボランティアの重要性を伝えたい」と発言されています。私も本当にそうだと思っています。オリンピック等に限ることはありませんが、ボランティア精神は、与えられたきっかけではなく、自分から一歩踏みだそうと意識していけないと育めないと思います。学校でも子どもたちにもっと働きかけてみたらどうでしょうか。

○並木市長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 6月28日と29日にG20が大阪で開催され、世界の主要な大国が集まりました。オリンピック・パラリンピックは大国ばかりではなく、開発途上国も参加します。参加国の社会・経済状況などには、日ごろは大人でさえ関心をもつことは少ないので、子どもたちにとってはなおさらかと思えます。

既に取り組んでいる学校もあるようですが、とてもいい機会ですので、国を選んで、前もってその国の社会・経済状況を勉強する。ただ勉強するだけではなく、例えば、市内でパブリックビューイングを行い、その国が出場する競技が始まる前に研究成果として発表し、その後でみんなで観戦する。そうすると子どもも親も一緒になってその時間を過ごすことができるので、同じ「観戦する」でも、「感動の残る、厚みのある」観戦と言えるのではないかと思うのです。

市長が発言されたように、今は家族でも個々にテレビを観るような時代ですから、パブリックビューイングができれば同じ感動を分かち合うことができ、絆になっていくのだと思います。それは市としてできることではないかと思えます。

○並木市長 ありがとうございます。

宮下委員どうぞ。

○宮下教育委員 先ほど市長が言われましたのは「形として残らない」、いわゆる無形のレガシーのことですね。「無形」であれば個々の思いや価値観の追求になりますので、本来的には第三者がどうこういう範疇（はんちゅう）ではないのかなとも思えます。

あるテレビ番組に、年をとらない不思議な5歳の女の子が登場します。名前は伏せておきますが、その女の子の決め台詞に「ポーッと生きてんじゃないよ！」という言葉があります。

私はもう、オリンピック・パラリンピックの自国開催には二度と立ち会えないだろうと思っています。そう思うと、ポーッと生きてはいられません。年長者として、「意識してこの

間を過ぎさないと何も得られないかもしれません。もったいないですよ！」という「気づき」は発信していかなければいけないと感じています。

私はいつも「三つのC」を意識しています。そのCの一つ目は「Chance」のC、二つ目は「Change」のC、三つ目は「Challenge」のCです。ぜひ、このチャンスを生かして自分の考え方を換え、挑戦するというチャンスを、私たちは常に意識し、自分自身を変えていくことを忘れてはならないと常に自問自答しています。

○並木市長 ありがとうございます。

身の引き締まるご意見をいただきました。

尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 2020年はちょうど市制施行50周年ですね。私も今は反省しているのですが、定年までは会社務めをしていまして、住んでいる地元のことについてまったく疎い生活をしていました。実際は現役世代の多くがそうだと思います。

そういう現実ではありますが、オリンピック・パラリンピックの東京での開催を市制施行50周年記念の追い風と捉え、日ごろは家庭や地域になかなか戻って来られない大人がスポーツや市の50周年記念の行事を通じて、地元を意識できるきっかけとしてもらいたいと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

ご発言のとおり、オリンピック・パラリンピック開催イヤーは市制施行50周年と重なっており、これはかつてないと言いますか、この巡り合わせのタイミングはもうないとも思っています。取り組みについては、現在、企画調整課を中心に庁内で検討しているところですが、50周年に当たることも市オリジナルの取り組みを考えるヒントになっていくのではないかと、相乗効果ということでは大変意義があるのではないかと考えています。上手く関連付けていくというか、目指していけるのではないかと考えています。

私も市民の皆様とともに、「2020年7月、東京オリンピック・パラリンピックは開催されたんだ」ということを実感したいと思いますが、それには国や東京都が用意したプログラムを見聞きするだけでなく、直接、参加してもらえることが何かないのかなと考えています。この機運醸成を何かとか捉えたいと思っていますし、宮下委員がおっしゃられた「もったいない」とも本当に思っています。

市民の皆様に参加していただけることが何かありますか。

○宮下教育委員 ただ今の市長のご発言を伺いながら思いついたことがあります。大げさな表現になるかもしれませんが、個々のムーブメントになり得るものであること、多くの市民が参加できることが何かないかと考えてみました。

あります。それは2020年を“大きな締め切り”と考えたらどうかということです。言い方を変えれば「自分をそこに追い込む」ということになりますかね。先ほど私が申し上げました3Cになりますが、市民の皆様にもオリ・パラの開催1年前から、大小を問わずに目標を立ててもらい、開催後にどれほど目標の実現に到達したかを発表してもらったらいかがでしょうか。

市制50周年記念の取り組みの一つに関連付けるとすれば、コンテストを開き、事前に応募していただいた目標の達成度について発表してもらおうとか。もちろん目標の内容や達成度に優劣を付けるものではありません。審査員は大変かと思いますが、審査員の心を動かした目標や達成までの道のりを選んでいただければと思います。

○並木市長 宮下委員からご提案をいただきました。

私も常々、「オリンピック・パラリンピックの開催は目的ではなく通過点である」と考えていますのでご提案の趣旨はとても理解できます。

ほかにいかがでしょうか。細田委員どうぞ。

○細田教育委員 宮下委員のご提案に関連しますが、多くの方に目標を立ててもらい、達成までの道のりを公表してもらえらるるのであれば、私は子どもたちにとってもいい影響があると思います。公共施設に投票箱を置いたり、市のHPに書き込めるようにするなど、子どもも大人にも応募してもらおうことはいかがでしょうか。50周年つながり目標500人とするか、50人か…。

○並木市長 ありがとうございます。

宮下委員のご提案に沿った形でのご意見をいただいておりますが、ほかのご提案もありましたらお願いします。馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 すみません。他の提案ではないです。私もその提案に傾きかけています。

子どもたちには、学校の勉強に限らず「できたらいいな」「こうしたいな」と思っているもなかなか達成できずにいて、もやもやしていることがたくさんあると思うのです。

“大きな期限”プラス“大きな目標”でなくても“目標の宣言”をするということはプレッシャーにはなりますが、反面、自分に対する励みや責任感にもつながると思います。実際にコンテストには応募しなくても、そういう働きかけをすることで子どもたちの心の中に目標をつくってもらい、こっそりとクリアしたとしても達成感が生まれ、自己肯定感が膨らむことになったらいいなと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

ここまで、宮下委員のご提案を柱にご意見がありました。

宮下委員いかがですか。

○宮下教育委員 「目標の宣言・達成」を取り組みの一例として申し上げましたが、思いもかけずにご賛同いただけただけようで、ありがとうございます。「成功体験」の積み重ねは、子どもたちが大人になっていく段階でももちろん大切なことですが、人生100時代となってきた今では、生きがいにもつながるとても大切なことだと思います。

私の生き方の学びの一つになったものがあります。今から40年ほど前のことですが、あるお寺の前を通った時に、目にとまった山門に書かれてあった教えです。今でも大切にしています。どなたが書いたかは分かりませんが、そこにはこんなことが書いてありました。

「今、大切なこと一つ一つの積み重ね、積み重ねの上にやがて花咲き実が実る」という言葉です。このようにしてつくられた実こそが、東久留米市が求めているレガシーだということ強く感じています。思いつきからの発想でしたが、みんなでやってみようではありませんか。今、そんなふうに思っています。

○並木市長 ありがとうございます。本日はいろいろと学習させていただいている感じです。

ほかにご意見はありますか。馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 今のご意見のとおりだと思います。成功体験はとても大事で、達成感も併せて持てば忘れられないレガシーになると思うし、子どもたちの自己肯定感がアップすると思います。もちろん大人にもかもしれません。

目標の宣誓、達成度のコンテストに関連しますが、2020年には並木市長にもぜひ参加していただきたいと思います。例えば「市長の一言」として、市役所の1階や2階に掲示したらどうでしょうか。来庁者がそれを見て「はっ」と気づいたり、「実はあの時の市長の言葉に救われた」みたいなことが後日談であるかもしれません。そんな2020年のレガシー

もあると楽しいと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

わくわくもしますが、一方、いろいろプレッシャーも重くのしかかるご提案をいただいています。ほかにはいかがでしょうか。

細田委員どうぞ。

○細田教育委員 宮下委員のご提案をさらに補強したいと思います。目標を達成し、コンテストで選ばれた方には金品以外の副賞を付けたらどうですか。応募してくれる方が一人が多くなるために。

○並木市長 ありがとうございます。

宮下委員どうぞ。

○宮下教育委員 オリ・パラのお揃いのポロシャツ着用のお蔭かと思いますが、皆さんがみんなリラックスしている雰囲気がいいのでしょうか。本日の会議ではいろいろと思いつきます。

先ほどから市長の顔を拝見していて、「一日市長」という体験もあってもいいのかなと思いはじめました。具体的な実務をしたい希望があれば「一日何とか部長」もよろしいかと思えます。警察署では「一日署長」が就任していますが、「市長」や「部長」体験はあまり聞いたことがないので、そのようなことができれば楽しみながら応募してもらえないかと思えます。できれば一人ではなく、将来、本当に市長に立候補するかもしれない、10代から30代ぐらいまでの若い市民に応募していただき、2020年には3人の「一日市長」さんが誕生するといいなと思っています。市政施行50周年記念ですので、人生100年の折り返しの「50歳の」の方にも応募してもらうのもいいかもしれません。さらに言えば、50周年1回だけの取り組みではなく、今後も50周年を契機に続けてもらえる事業になるといいなと思います。

思いつきでいろいろな発言してきましたので失礼なこともあったかと思いますが、皆さんで知恵を絞りながら、いい事業をつくり上げていきたいと感じています。

○並木市長 ありがとうございます。

副賞と言えども、ただ今、一日市長が誕生するというご提案がありました。私もうかうかしてられないと感じているところです。ほかにはいかがですか。

馬場委員どうぞ。

○馬場教育委員 私も「一日市長」はいいと思います、費用もそれほどかからないでしょうし。

中学生は職場体験、大学生はインターンシップとして市の職員の仕事を体験しているようですが、将来の職員採用試験にもよい影響が出るかもしれません。

一日ではありますが、「一日市長」の実現は“開かれた市制”のよい印象を50周年を機にさらに持ってもらえるかもしれないと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

身の引き締まるご提言をいただいています。

尾関委員どうぞ。

○尾関教育委員 「一日市長」だけではなく「一日副市長」「一日教育長」もあるといいのではないですか。オリンピック・パラリンピックの開催、市政施行50周年記念だからこそ、その期を捉えて、市政・市の教育は市民がつくっていくのだということを知ってもらいたいと思います。

○並木市長 ありがとうございます。三役そろって緊張感が増しました。

さて、本日は、いろいろご意見をいただきました。「私の中に最高のレガシーを残す」た

めに、オリ・パラの開催を契機として、市民の皆様にも成功体験の一つとしていただきたく、目標づくりをしてもらったらどうかというご提案もありました。2020年は先ほど来おっしゃっていただいています、市制50周年の節目にも当たります。ついては、その50周年記念の取り組みの一つに、目標達成コンテストの副賞として「一目市長体験」のご提案もいただきました。

市民の皆様には個々のレガシーはもちろん残されるわけですが、何かしらの縁があつて、2020年を東久留米というこの地で一緒に過ごすわけですから、「東久留米レガシー」も共有できたらいいなと思っています。「東久留米レガシー」が深まれば先ほども「絆」の話を見せていただきましたが、市民の皆様の「絆」もさらに強まり、深まっていくのではないかと思っています。市民の皆様個々の思いと言いますか、個々のレガシーが合わさってこそ、「東久留米レガシー」になっていくのだと、本日の意見交換を通じて強く感じたところです。

◎閉会の宣告

○並木市長 以上で令和元年度第1回総合教育会議を終了します。

本日はありがとうございました。

(閉会 午後零時03分)

東久留米市総合教育会議第8の規定により、ここに署名する。

令和元年7月18日

市長 並木克巳(自署)

教育長 園田喜雄(自署)